

和訓栞

志之部

十一

			二一六五	和書門
八二册	一〇架	函	號	類

庫文閣内				
二〇三函	三架	二一六五	八二册	和書
		號	類	

内閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (12)
函號	263 10



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



倭訓栞前編十一

志の部

洞津 谷川士清 纂

教部  
文庫

圖書  
文庫



志

為とよむハすともり○石と酒りてよむハ寸とハ非然の辞之奇ニ依

乃事情ニ就て未然といふあり不ハ未也といはれり又自ら豫て禁す

るまじり勿ハ禁止此辞とほせり○助語ニ多くいふを好ま

る未表現在レハ獨福をいふといはれり○助語ニ多くいふを好ま

りてやさしくすゆれば好くたらしむるは是とす○助語ニ多くいふを好ま

る未表現在レハ獨福をいふといはれり○助語ニ多くいふを好ま

久しからざるハ未表現在レハ獨福をいふといはれり○助語ニ多くいふを好ま

たむるハ煙たむるハ未表現在レハ獨福をいふといはれり○助語ニ多くいふを好ま

姫あり蒂も蹄も同一倭名抄にも羊蹄菜の若しと云ふ新撰字鏡

にも志れり○今俗に云ふも羊蹄菜の若しと云ふ新撰字鏡

知母やまこれれり○土師薬師繪師塗師

此ハ世々為此業といハ師ハ信シテ○已ト一トある可日年記  
古事記ハ云々○死志といハも昔ハ云々すハね祢の行ハ用  
けりすぎ及也○磯ト云ハいハの暗石も同一磯城磯長ハ云々

△此ハ也 為合セテ運ヨク泰石ありク造化と澤ヨク

△志ハす 弒字と云クハみ本ヨクハ音と引ク也同此ハ

△志ハ云ク 源氏ヨク也宿徳也ト云ク

△志ハ云ク 和名村ト舅姑ト云ク傍人傍人女ハ云ク

及志ハ日年記ヨク婚姻ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ヨク婦人ノ父ト源ヨク媛嬪ト云クハ云クハ云クハ云クハ

名與婦稱夫之父同一云婦翁也外姑和名與婦稱夫之母同一云婦母也

○婦ト姑ト云クハ云クハ云クハ古詩ト人命百年能幾何後來新婦今為婆

ト云クハ云クハ俗ハ慈花ト芽落ト墓ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ハ俗語ト云クハ云クハ也ハ云クハ云クハ云クハ

△志ハ云ク

△志ハ云ク 新撰萬葉集ハ芝折ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

系集ヨク折ハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ヨク折ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ヨク折ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

折ハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

書ハ槩槩識也周伯温ト説ト禹貢隨山采木謂隨所行林木斫其枝為道

識也ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

○近世文房具ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

乃奇ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

ト云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

カクハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ云クハ

○魚ハ云クハ即まんざん○城廓ト云クハ云クハ

△あり 鹿といふ肉香此天を角乃收れねしよりて多とをさしゆくに  
多と漲らもの也と山家此は角十二北岐あるその南都正倉院に  
寶物より又楓の形しるものなり軍用より事多くんことり眼科より  
角と角をいふ甲斐國大升光をう妹強力なりし麻の角と膝より  
あり○さしれ麻ハ麻児ていねのありとあり○草庵集より  
すまふふしし麻のなるをててさしれ秋のあり

事文類聚より野鹿伴茅屋とあり○新撰字鏡より政と麻此とありわが  
くとあり○小野左右府記より天貳所献白鹿云云白鹿ハ景行紀より  
ることり○史より多入鹿為證前言といふものなりて版さるるれ負て  
さしれ八耳よりせり少や○春日より麻と神使といふハ第一殿ハ鹿  
島神とて神幸れ時若くはふより古記よりんことりて是日穀治と  
り麻氏多くとてこれあり○さしれしむかハふまむと麻是といふ辭  
○さしれしむかハ此は怪れまて定てハ和語此はゆり字あり万葉集  
に諾字といふものありて新勅撰集より

麻と進老いといふことり淮南子より逐獸者目不見大山といふ

○麻と進老いといふことり淮南子より逐獸者目不見大山といふ  
乃謂はまといひ進はれ志賀幸法よりせり人れまかるとせりて  
る是ことりといふことりて世より同也といふ○志賀のま天智天皇の  
大徳まといふも荒みりるもまありハ万葉集より過近江荒都といふ  
○志賀寺ハ崇福寺也三井寺此はよりき○志賀れ山といふハ小石河此  
然よりよりよりより如意う嶽といふも志賀はゆりることり○新勅撰集  
志賀れ浦といふれまの浪といふて天降りけりハ乃り

是は延暦七年傳教大師敷山建立此時三輪明神五色の光れ波の上より  
舟とほへて志賀れ浦に漕寄りていふありといふことり

志賀れ 然とまみ神代紀より唯然もよりあり志賀れ如といふことり乃り  
有れ也志賀れわりれくはて及せり也万葉集よりゆりもゆりんといふことり  
是もゆりんとることりまありは如是也といふ然と志賀れといふことり

○あつちのあつちと云ふは同一多系集古今集と云ふは三輪山と云ふは  
 下つともめりわあから乃さつりて今れは後にもは後さつり○ふれをく  
 わさばれ略也○爾と云ふは詞之必然也と注せり如是切音爾と云ふ音  
 訓と云ふは二合れさ也命と云ふは堯典と云ふは古語也然也と云ふは又句末  
 然と云ふは馬と同一さつり論語と不得其死然孟子と云ふは若以美然  
 類也又晋宋の文は寧馨如馨地爾と云ふは此の寧一字馨一字ハ  
 志かりと云ふは

志かど 不如不若不似と云ふは二義あり如くは云ふは及ばせし  
 りふと云ふは

志がふ 顕昭れ説と云ふは草とかりて末種と末と並び合さるといふは  
 といふつと云ふはと云ふは草とかりて末種と末と並び合さるといふは  
 かけつと云ふはと云ふは

志のじ 蹙と云ふはあつちと云ふは及びて神代紀より山目と云ふは  
 志と云ふは

志がく 海氏と云ふは試樂と云ふは音楽と云ふはと云ふは調樂と云ふは也  
 海氏音より筆に爪調琵琶撥合と云ふは唐の琵琶試樂ハ系ハ  
 第一と云ふは試樂と云ふは海氏と云ふは

志のく 神代紀と云ふはと云ふは海氏と云ふはと云ふは文選れ海と云ふは  
 多略而不能載也といふは謹中と云ふは吾欲云云猶言如此如此也といふは  
 又云爾と云ふは神代紀と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 はと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 如此也といふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 怪れと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

志のく 今昔物語と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 今昔物語と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 うさまはれ物語と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 あがらみ 万葉集と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
 川あはれと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

みつろととりぬれぶらみはれぶらみ井ぬれぶらみやぶらみあり神  
れぶらみみぬれぶらみ昔れぶらみむれぶらみあつらぶらみほつらぶらみ  
○古今集

林森と志うらみらそて唱麻れ目よはらそすや音れまけら  
頭昭のほ麻の務う枝と折決てふらそださうらうかの志かう  
みまぬれまらひありとら

而然字とありあはれまらそと音らそめかそそらと  
い詞は今そは好まらう細ととり雖然もよりあはれほら及は文  
多く然れかりは爾と用う万葉のそらそ見也

而字因辞也因是之謂也ほら然字又然而とらより志  
かくそ也くとりと同韻也然と如是若此之辞とほら志かくは如是れ  
まら然及はそとれまら

万葉集のそらそら世そらだといふは同一志ら及ら然為蟹  
そらそらゆらから中といふそら○参河ふは志らすれわらゆら金

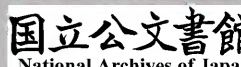
系集更級日記よるそら大門村八劍社れ辺あり

志らそら志ら 然そほの取ありそら頭昭あり志らそら志らといふ詞りて  
知らかくぞといふそら契沖れ及て  
あらあら 然そらぬらと也さうあら同一日本紀は一切とあり今  
海字とありはそら○今俗略そらありもいあり

加以或は加之古事記の序は重加とあり非然而  
已れそらあはあく至若とらむも同一新撰字鏡は音とありは訓と  
そら不音とありはあそらも別とへ今はそら何くせまらあり

日本紀は重字古事記は繁字とあり敷れそら○志ら  
院とありそらそらそられ助辞といふは志られ約言といふ○  
漢とありそらそらそら韓語とや○磯城は堅固と称

そら磯城神難とらそら百磯城れ祝称もゆり後には和れ地若  
ともるゆら○枕草紙は頭辨れ志らそらあつらてといふは職れ音とほら  
弟小嶋れ志らそら世れ志らそらそら式字あり



仍旋頻屢連比存ありとあり重繁れ之仍ハ頻也と注を旋  
 々後渾也と云ゆ屢ハ頻數也と注を連ハ俚語れついで也此も連こ  
 と云ゆ切と云む論叨れ之俗も云つてと云るに支ゆ○おれど  
 云といふ云る云る○全浙兵制ノ女鞋と云るも云んこと譯也  
 底用皮包席と云る履そのものをいふ字拾遺に云るは云る下字集  
 子履切と云ゆ今云るは云るといふ云んハ金剛也安於おる云るハ一  
 草履を織て管と云人同ハ金剛に性体と云るは云るハ一掃といふ今  
 頃男と云る其履と云て金剛といふ云る金剛は地若も云る云る  
 男娼れ召つてと云るといふと云る

日本紀ノ席と云る敷居れ敷くは古ハ席と云るを坐  
 せといふ是今れぞ○考經ノ曾子辟席曰る云るハ若れ同  
 の意ハ席を敷きて坐すを復坐語也と云る  
 万葉集ノ敷藻相も朝手作と云る裳もハ一きと云る  
 敷居ハ敷居れ裳と云るゆれ敷居るハ一

色紙と云り海成と云る云々一と云る文ありと云る枕草紙

此みられくの紙云る云々一と云る云々色紙形云々して寸法は定  
 められ世に事あり一或は定むる小念云るは色紙を云るといふ  
 月記補ノ文曆二年嵯峨中院色紙形善惠入道自天智天皇以來及家隆  
 卿と云る今いふ百人一首は云るハ一凡雅集にも賀茂重保ノ堂に障  
 子ノ時れ云る云々此云と云て若くみと云る云々色紙云々云へ  
 云々○小念云紙ハ字法れ云司所云此の云々一雙ノ百枚と押す○倭名  
 抄ノ色紙といふ云々讀也といふ漆紙と云る云々云々今ハ紙と云る  
 色紙漆紙ハ字畫史ノ云々云々○婦女れ云々云々云々打とる云々  
 云々形云々云々云々云々云々○古書ノ色紙形といふ云々  
 又草子形といふ云々云々云々○古書ノ色紙形といふ云々

公事根源云々云々云々ハ敷居く堂上ノ敷居る座ノ居ると云々  
 云々ハ江ノ水身抄ノ諸可昇着堂上所敷座也引聲ノ是時曰敷尹と云々  
 云々式ノハ必侍座と記ノ江ノ水身ノハ侍座と云之云井尔とも云居るとも

委尹とも記せりされはあまのんを唱ふるあまのくと音便とてよひこひ  
 けしは兄トといひふふとあまのんといふはたまたまのんといふは  
 はりや又侍所とつらふはれはとあまのんといひて宣ひては略して  
 あまのんといひていひしとんゆとてより侍所侍止宣ふ事候とて宣ひ  
 あまのん  
 初撰字候は泡沓とてみ月本紀は重浪万系集は敷浪腫浪を  
 と云又跡位浪跡座浪とて菅万の頻波とてありとてはこれとて万系  
 うとて浪の志づくさうみ布とてとるはれ志づくともあり定家には  
 わづらとてあまのんといふはれとてあまのんといふはれとてあまのん  
 あまのん  
 敷栲敷妙敷細布栲布万系集はかり或は色妙ともある  
 とてあまのんといふはれとてあまのんといふはれとてあまのん  
 あまのんといふはれとてあまのんといふはれとてあまのん  
 あまのんといふはれとてあまのんといふはれとてあまのん

あまのん  
 奇書といふゆゑは此神といふは新撰集記陸湯乃此神は仕式  
 神といふは式依といふ事もあり言ハ人形の識神といふ巫蠱は妖術なり

此の撰集抄はこれ織はあまのんといふは字拾遺とてあまのんといふは  
 古記は式は厭着といふは元代此人形といふは元世祖は阿合  
 馬と誅して熟人皮と得たりも呪詛は邪法加へり○撰集抄は高野は  
 奥山にて髑髏骸骨と集めて人形と造りてあまのんといふは公卿はせり  
 現に朝廷に仕へて官禄と文て存せりといふ事と記し平沢氏は流し  
 あまのんといふはあまのんといふはあまのんといふはあまのん  
 入あまのんといふはあまのんといふはあまのんといふはあまのん  
 かり形容とて具なり鼻耳目悉く運動はあまのんといふはあまのん  
 らふ全く人もあまのんといふはあまのんといふはあまのん  
 巻ひまはりてあまのんといふはあまのんといふはあまのん  
 出せしあまのんといふはあまのんといふはあまのん  
 あまのん  
 城島乃都は欽明天皇は久しく治めたまひしあまのんといふはあまのん  
 いふありといふはあまのんといふはあまのんといふはあまのん



敷坐治此八十島中みく万系集日本國者皇祖乃神之御代自敷座流  
國尔之有者とも天皇之敷座國せともいつ書し島敷王といつ敷此也  
一亦此名を奉ていつへともいつくは○音名をいつて志を治れりといひ  
や〜ゆも右此記詞此敷と述〜や〜ともいつて志を治れりといひ  
是れ〜そ人此ふ〜りつ〜りて神代をいつけ〜志を治れり

志を治れり  
頻〜志を治れり  
雖此已々備しそ羽と志づく青此言くすふま〜りあり  
志を治れり  
直〜曉の事ふいつちなりといつ〜○龍鳥々省經といつ俗流ハそれ因は  
居此閑黙なりといつ〜此塔の事

△志く  
多く此序つげ〜り重字此〜○志〜り重仍と〜色へ  
了流ま〜布〜りむも同〜神代紀ハ鋪設〜り藉〜りむも同〜○  
神代紀万系集及字〜り古本記ハ追志〜り後此可〜りた〜り月  
形〜志くものそ〜りといひ是〜りお〜りといひ治も〜り〜○書〜り如

字〜り及れ〜り不如ハ不及此〜り○知れ〜り紙と〜り志く〜り  
志く  
天陰りて小なるも〜り頻昏此〜り志く〜りのあ〜りといひ此  
〜り〜○新撰字鏡ハ露又電〜りみ童蒙頌韻ハ露〜りみ倭名鈔

小霰雨と〜りありあり〜り雨と〜りめ〜り霰雨ハ小雨也といひ時雨ハ漢晋春  
秋ハ喜如時雨と〜り好雨如時節此〜り志く〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
と列〜り十月也〜り源〜り古本集ハ此志く〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
と志く〜り鐘と〜り志く〜り黄鐘此〜りの如く古音〜り〜り朝辭音ハ  
志く〜りといつ〜り○志く〜り此系ハ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り今も志く〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
霜降り此志く〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
通〜り〜り

十月志く〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
唐詩ハ風吹山帯遙知雨盧山記ハ天將雨則有白雲或冠峯岩或且中領  
俗謂之山帯不出三日必雨と〜り○定志〜り此可〜り志く〜りのお〜り〜り〜り

宗祇はあつしき縁のつとむれといふをかりといふ○後撰集は  
者ある時とて袋草紙といふことなり

あぐむ おの吹合さるめく為出る事よふ万葉集に角れふれよと  
ぐひわひんさるるう同契かえり又あぐむといふは信濃もひあはれは  
同語ありんうし本國はあぐむ又あぐむといふはあぐむ又びる誠はあぐ  
すじをいよよはあぐむといふ

あぐく 万葉集は屢とあり又あぐくといふはあぐくといふ○新古今  
集はあぐれあぐくといふはあぐくといふはあぐくといふはあぐくといふ  
あぐくといふはあぐくといふはあぐくといふはあぐくといふはあぐく  
あぐくといふはあぐくといふはあぐくといふはあぐくといふはあぐく

あぐめふ 古今集はあぐ風の吹あぐといふくめあぐれあぐりあ  
けあぐ頻るあぐ一説はあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ

あぐけ 日本紀はあぐとあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ

あぐけ也今もあぐれあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ

あぐけ 誓とありけり及く布とあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐけ也昔盛貞とあぐ○あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ

あぐけ 誓本はあぐり中後被は彼方此誓あぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ

あぐ 津代紀は醜男醜女凶目とあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ  
あぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐといふはあぐ



あびむやうへー

あや 日本紀に獵者さうり後世に野矢也といふ○墜表紀に徳屋らひ  
と記して後にはのうが麻矢のまゝとてとる

あふゆ 盤根にや雲之奇は華れあふゆははすのまゝとる

あふま 和名抄に腰とあり肉腕れあふ

あふえ 鹿笛也記述者よ女れとけりらとて此もゆふに於て奉還すよ  
らとあり今ハ鹿此耳皮或ハ腹とあり此はを用う又蝦蟇皮と勝りとい

あふう 太平廣記に以鹿心上脂膜作黃とて遼志に七月上旬射鹿夜半令  
獵人吹角做鹿鳴既集而射之とる

あふまひ 日本紀に樓遣進退とあり繁舞はあふまひ一俗傳よあふまひ

あふれい 日本紀に進退維谷と同一源也あふれい

あふまふ 君ろあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

一記よあふまふ無言れあふまふあふまふあふまふあふまふ○獅子舞ハ陳氏樂書  
り唐太平樂亦謂之五方師子舞とる元史に伶人蒙采舞作師子舞

以迎駕とるさう西涼伎も同一伊勢に云ハ法程に師子頭りて外宮にこ  
と毎年舞一體ハ舞年とて一記まふは事ありと神前師子狛犬より事

記り隼人ハ秋舞と摸一とるあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふびと 神代紀に実人とるさう皇代紀に実人部り魚肉を割烹とる此

紀也さりと死者此事も物てとてハ霊神とあり用らる所へ一魏志倭人傳り

始死停喪十餘日當時不食肉といふ喪主と持て不食へー

あふぐら 日本紀に奇よはゆ万葉集に実串呂とあり盤劍に云と美とと

好とてつけりといふは免況よ六律に刺てさる肉ハま係らまこととるさう物

撰字後ハ櫃と實れくいと訓せり字ハぬらう

あふすぬ 美久記に自水とるさう自ら水も投まるといふ今入らといふあふ

○薪水と称くもろと自炊といふ

あふせ 日本紀に殺とあせまらうとみ奇も巳とまを殺とといふをうあ見

とくさあり古事記に奇よいのちあるあせとあせんと又ねとあせんとさあり

たをと物めらる辞なり

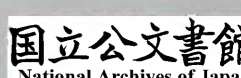
△あそ 粟粒粉倍々大ニ此をといふ物と云々ういひはす大に家大饗蘇  
 甘栗使盧折抵二合一合蘇六二小二一合甘栗大八小八と云々ういひはす  
 勸孟三四献間羞飯汁物最煉蘇甘栗と云々ういひはす和名抄  
 蘇密煎と云々ういひはす蘇酪と云々ういひはす蘇酪と云々ういひはす  
 蘇四壺と云々ういひはす蘇酪と云々ういひはす蘇酪と云々ういひはす  
 貞觀七年仁和三年此下は貞觀と云々ういひはす延喜式或は凡該國貢蘇各  
 依番次其取得乳者肥牛日大八合瘦牛減半作蘇之法乳大一斗煎得蘇  
 大一升と云々ういひはす死書は生蘇味と方等此時よ喻へ熟蘇味と般若此時よ  
 喻へ醍醐味と法華涅槃の海よ喻へうかきと蘇酪といふ今令の典藥寮此  
 下は藥戸乳や西宮記は乳牛院典藥別所と云々ういひはす是は類聚三代格  
 和藥使主福常習取乳術とも云々ういひはす度量は大小此是らうはまらと云々  
 云々を用ハ内藏寮式は正月取勝王經齋會講讀師及僧綱各施蘇一壺  
 干姜三兩と云々ういひはす諸兩法式は以牛糞塗場地以牛乳酪及糝米食請  
 兩法師といふの大雲輪請雨經と云々ういひはす又南尼華羅國崇牛糞といふ

半之才圖令より凡呪師一日不食若不忍飢唯得食蘇と馬頭儀軌より云々  
 ○紫葳れと云々と花紫葳れと云々と云々ういひはす○細素ハ僧俗と云々  
 云々く 退く家と云々と依日記より云々ういひはす○後撰集伊勢物語より云々  
 族れ云々なり

△あそ 古といふ云々云々云々と同韻通せり三寸古といふハ活書  
 云々云々○望草葉れと云々ハ黄と云々ういひはす礼の集説は黄草之古と云々  
 ○下と云々ういひはす此略と云々ハ○新と云々ういひはす此略と云々ういひはす  
 云々云々○小昔ハ昔昔此略と云々又云々と云々  
 云々云々 古昔泥と云々ハ慕と云々ういひはす同ハ返と云々ハ  
 云々云々 浸と云々ハ沈下と云々ハ  
 云々云々 倭名抄ハ前夫と云々ういひはす此と云々ういひはす今も云々ハ  
 云々云々 万葉集ハ下極と云々ういひはす此と云々ういひはす暗講此略  
 ○筆より下極と云々筆此腹此中の極は似と云々ういひはす○万葉集  
 金山の云々ハ下極と云々ういひはす古昔此と云々ハ此と云々ハ下極と云々ハ伊豆志

表登賣とある所也式よ丹波國船井郡志多比神社出石鹿岨部神社  
 けり平氏を子傳よ下水君形物ありきねと下干れ衣は世ととみちり  
 とつらき如へりよて又万葉集又秋の志とへら妹もえとつら 記形と登  
 屋し燈ととつら ○下極小川ハ伊勢飯高郡下つら下見標も同下と云  
 坂は異方極田は元方岸に村は東南に小川をく齋宮群行よはとつら  
 鐸鈴と止めりおつら 伊勢守延喜式もよとつら 是系に此古乃りて  
 今乃れ東山也 ○万葉集ふりつ下極小川の風流勢形よつら  
 ちかかみ 後順とつら下よはつらと云へり 遵も同  
 ちかかみ 詩よ婦有長舌維厲之階と云 弟傳よ長舌能多言者也と云  
 ちかかみ 萬葉集よ女く妻集り  
 ちかかみ 方よとくみつれり乃とつらと云れ長くし世とつらひもよつら  
 是ハ長かりハ乃とつらり方よとくくと云せぬ伊勢記よいふ所かハとたの  
 かの一系とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ 新羅字後よ咤とつらり礼記の咤念もとつらみちとつら

ちかかみ 延喜式新葉に中よ古洲と云とつら ○倭名抄よ禪徒を訓と云  
 舌不正也と云せり倭名抄もさすかよとつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ 倭名抄よ胡とつらり咽下れとつらり  
 ちかかみ 下慥に及よ或ハ健とつらり海氏よ海詞と云とつらとつら平家  
 物語よられ海とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ 親とつらり下海に及下ハをわつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ 萬葉もつらり  
 ちかかみ 名名伊勢物語よ下海とつらり下ゆふひとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ 衣紐とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ ○人うとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
 ちかかみ ちかかみとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
 ○相摸集り



とらとふいつ、解とまきの此片活ひあるをすれ下り  
二の方系集り

そりして後心一紐をひりしてそく解了すたふをまそ  
伊勢物語り

二人してひきひ一紐を一人しておろすまそこのとまほし  
乃きそて古事記は汝所堅之美豆能小佩者誰解と云しはなり小佩も

下紐と○たよひの伊勢物語は是のたよひ  
依ておりのひびてなるむらさきよなれ下紐のりてそくす

○下紐は雲の奥列をたよひ  
文選は髻屑をたよひをらう此はぬへ

たよひむら 古事記は思ひたよひの字書に知也と云ふ又操とむ字彙に調也  
治也と云ふ下紐のたよひへいひてひれ日記は奇此双紙と云をえりた

たよひとんてり  
たよひがさこ 襦とよめりぬ下襲とみこり袍はたよひをたよひとて名をた

ゆせり下とて裾はけ裾也

たよひかま 勅撰字鏡は禪祖憚とあり口大誇と記せり此は家略抄は下  
袴と云ふは後綾と云ふ

△たよひ 勅撰字鏡は名抄は榻とあり車は床と云ふと云ふは具なり  
さかど榻字の車は此は路と云ふは唐韻は床也と記せり

たよひはかき 昔一男の女をたよひひて九十九夜をたよひて車は榻と  
たよひと云ふは白糸は海をたよひつらまらりてまをたよひり

後漢は修政書約は此記  
たよひひきとてたよひかきと云ふは白糸も同じまをたよひ

△たよひ 賤民と云ふは沈淪此まを又下男下女と略してつたよひたよひ  
乃ゆりといふ方系集は倭文手纏ひやう記音ゆきと云ふはたよひも

たよひもよめは倭文は後と云ふはたよひり○倭文と云ふは沈淪  
万葉集に下りたよひのたよひつらまらりてたよひのたよひつらまらり

たよひ今もたよひゆきと云ふは新日御記にも正中御飾記にもたよひはたよひ







鳴也とありたるといふ田事あるへいといふとて今倒あり古今集り

いふとて田つくりはうやうやといふはこれいふとてあるくといふ

松葉紙は田務とていふやういふはこれいふとてあるくといふ

と田よたつといふ格物論は杜鵑三四月間夜鳴達且田家俟其喚興農

事といふといふ○伊勢歌集はこれいふとてあるくといふ

天のいふといふといふいふといふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

文布為衣といふといふ又神代紀は倭文神ハ常陸玉といふといふ

記ハ常陸綾甲斐班布といふといふ常陸風を記し静織里上古之時織綾之

機人未知之此村初織因名といふといふ

いふといふ童蒙頌韻ハ米といふといふ倭名抄ハ米飯といふといふ

鏡ハ精といふ白磨れといふ今も精米といふといふいふといふ

いふといふ筑後の俗祭祀必ず類米粉に餅なりといふといふ

いふといふ餅といふ○振夷は女ハ頭ハ銀鏡といふといふ

いふといふ倭名抄ハ部といふ又部ハ作といふ日本紀ハ障子といふ

いふといふ又釣部といふ擔ハ釣といふといふ○式伊勢歌集

郡ハ志等美神社といふ式儀ハ部野井庭社といふ

いふといふ倭名抄ハ茵といふ茵ハ褥といふといふ下履ハ茵

唐褥茵薰爐茵早婦茵といふといふ錦茵ハ唐詩にも見ゆ○新撰

字鏡ハ録といふ金といふ字鏡といふ

いふといふ

いふといふ

いふといふ

あやや、あややれ舒徐此きいり閑雅も記さ

あやたら 傳名抄一章断と譯せり彰氏家訓に注連章断と云々

と小使とのふりや

あやうべ 日本紀に償後とあり古事記に後若とありべひもあや

後執部あり

あやめ 腰刀此具といふ鴨眼のあやなりといり和琴及筆此をいり

同一律源抄に云々あり

あやけり 無静氣此あり東鑑に無度解と云又無四度計と

云々いり職原抄に勘解由諸國參期曰四度解と云云小町家集に

あやけり此れ福と云々ありあやからけり此れ也

あや氏り 帯志とけりといへり今もいり何なり朝野群載に四度

公文帳に云々あり

あやらと云々 源氏に云々ありあやらと云々も徳名にあり

あやらと云々のいり成りたり記よりあやらと云々

下学集に取次筋斗と訓せり杜詩に經過自愛惜取次莫論兵とみゆ邵注に  
取次換次而去也といり次てれきに推てゆふ事といりあやらと云々  
ま加へて後を院源流にま

あやらと云々、あやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の

日本紀に帶山と云々のあやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の  
あやらと云々のあやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の  
あやらと云々のあやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の  
あやらと云々のあやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の

△あやら 階級品科此字をいみ日本紀に色字文選に器新撰字後層  
又改と云々のあやらと云々のあやらと云々のあやらと云々の  
指の語あり名義集に此云文物國と云々の○あやらと云々の志那範重八辺の  
依本此族之語といふ宗鑑といふ○雄略紀乃奇なりいれらあやらと云々の  
あやらと云々の

あやら 市代紀に莫然といひ文選に垂字又葳蕤又扶疎颯纒といひ

伊勢物語のまゝに、楚字を用ひし所は、此のまゝに、  
かといふは、かう万葉集のまゝに、此のまゝに、  
ふり級とも、かゝる河ありて、○商人は、  
志は、  
わら、  
○管杖は、  
塩囊抄、  
みら、  
と、  
ふる乃、

伊勢物語のまゝに、楚字を用ひし所は、此のまゝに、  
かといふは、かう万葉集のまゝに、此のまゝに、  
ふり級とも、かゝる河ありて、○商人は、  
志は、  
わら、  
○管杖は、  
塩囊抄、  
みら、  
と、  
ふる乃、

そ郡名は、  
橘と、  
そ階坂は、  
曰方は、  
橘茶竹、  
濱と、  
と上野の、  
り証、  
の長袖、  
あるて、  
と、  
て、

同日といふたゆかへぬむし一  
 ちるごり 日本紀に差降れ字とせり新雅字後と云く中し  
 たり禮記の降等と云あることとむし非こと  
 ちるさごめ 日本紀に考選とあり品定れ承りて一海女按て兼れ  
 おさめあやといはかり  
 ちるゆふ 古事記のやうにゆふむしむむの事と云みかとは  
 あり小竹とうけう也といふ  
 ちるどれぞ 中納言みゆ源氏と云れはつみまあるまはかぜいたく  
 てやとせり新代紀に級長津級長戸邊と風津とせり口訣に規颯云級長  
 と云くし規颯ハ野分れ風也といふ又乾風といふとせり源順集  
 ちり端と云るれ風ハ吹もくかきく月夜とせり  
 △ちるせん 死せるあまをせぬいたせぬれと云く拾遺集と云く  
 △ちるぬ 日本紀に死せるあまのちるぬと云く去れぬことと  
 ちる音といふはつて過ぬ也と云く及一に新代紀に津と云く死と

まかるといふ万葉集に過去人といふことあるぬゆの志すせと云く  
 △ちる 日本紀に稲と云く米とも訓せりいとと韻をせり又新代紀に秋  
 垂穎ハ握莫くと云くはあふより此詞と云く一〇和稻荒稻祝詞に  
 米と和稻と一穂と荒稻と云く  
 ちるり 暮目のまをるちるちる荒ハ芦根と云くそのまをるは  
 乃ある音に似たりかくもいかりと三波一統といふこと  
 ちる風と云くといふ  
 ちれ 日本紀に篠又小竹新雅字後と云くありと云くこれ承りて又小  
 篾れと云くといふ〇更流と云く此は流とむと云くといふと云く此は  
 や〇綿尚と云くといふ〇多葉集の源流と云く石見那賀那濱田此城  
 ちるやれと云くといふ新葉集に伊勢の玉源流といふと志摩玉苧生乃の源  
 ちるへ後れと云くといふ海と云く此は海と云くつてと云くといふ  
 丹波意田郡垂山此城と云く源義経此を伝へり村延朗に充て衣孟資  
 村此八幡の尊氏の好む義と倡ひ一所〇小竹宮ハ和泉國和泉郡尾井村



あびひのそ 曹よの隠れ緒也曝布と用うと云うはひは海世此事其ハ  
織物に編入て用うともいつ又塊の内をまて整ふらうり付り物あり今世  
よりひの塊の紐ともいつ〇大坂落城の時よ本村忠實耻ぢ死かして  
権現公も討死とてそめておろるゝと作ありうと本田氏叔父乃三也よる  
られひのあびひの紐とま結ひあて湯とて捨らうと云うとも磯城  
証書よ証せり

あびひのりき 伊勢物語よえ田源ひれを西よよい遊りり

あびひのりき 陸若れ道形と云う昔より伊賀甲賀よひ乃達人有りて

あびひのりき 〇遊偵毒細も同い

あびひのりき 〇遊偵毒細も同い

あびひのりき 乃ゆみとやわと云うと云う

△あび 古今集よ今志と云うめふはあびれと云〇日本紀よ枝ぶと云

めふハ整系れああへへ倭名抄那の志よ標葉と云と別まらも同いあ

葉集よ葉まこ小歴本と云う今も葉まこと云う系葉れ字ハ郷談正音り

あびり 〇草萊と云う去たまよと云う初撰字後よ前と云うりそも葉まこ  
あびり一説よ葉まこ音轉也と云う万葉集よ乃れと云う初撰字後よ前と云うり  
あびり一説よ葉まこ音轉也と云う中山傳信録よ草草如茵極細軟  
葉結寸計連土不散布満山上と云うも同い芝字と云うみまこと云う書小  
まあや一古葉と通用と云う決りらと云うを聖武紀よ内裏生玉来と云  
と云ふ葉音來あれハ玉芝と玉来と云と云と云〇童戲芝と云ハ瓦  
松也外科正宗ハ瓦楞也も同いと云〇氏姓よ斯波と云又芝田有り  
〇若也れ司馬此野ハ園極と云

あびり 日本紀よ且と云あり苟且也今瞬息れと云

あびり 縛字と云あり緊張れあやと云一集韻よ紵以繩維持之とも云

あびり 〇あひへよあひは反接也

あびり 十一月と云ふ極と云ふもあひは反接也

あびり 〇あひへよあひは反接也

あびり 〇あひへよあひは反接也







ハ塩土老翁始て造るるといふ海をハ宿波氏より好まるといふ由云古  
 若は性ハ大己貴神より好まるといふ神海より  
 亦不海んの名を好まるといふまて丹より好ま素鵠此里人  
 の名これよりハ柄北末といふ神海よりハ十田狭小江といふ乃浦と稱まると  
 ○奥列伊北郡尾輪庄ハ大塩といふ里ありてそとハ塩井よりハ塩  
 を造り業とする民家多し海ハ四方ともハ田沼ありといふるあり  
 法陣此寺  
 わまともく浦ありてハ法奥此の川乃くハ塩の里  
 古今昔も此の川乃くハ塩といふも田沼此の川乃くハ海ありて  
 今ハ溝ありて塩といふは伊勢坂より丹生又近年ハ潮汐ありて此の川  
 とりまるといふと海田ハ其名と云ふと各ともくハありてありて  
 海へ至て近きハ西里府なりハ法大陣の寺あり  
 田沼ハの南ハ浦ハと云ふハ丹生ハ此の川乃くハありてあり  
 茅原村近ハと云ふ細くハと云ふ所ありと云ふハ古昔於大名持社社跡ハ

りり川系庄村ハ属ト社前ハ潮生測り系トハ亦有晦日潮水湧出と云ふ  
 又下野ハ塩岩の塩湯ハ産を列掛川此近きありゆと云ふ河内ハ錦江那按  
 山塩穴寺ハ塩石塔石塩ト○と云ふハ和名ハ印塩也近き塩屋より戎塩  
 を物と青色也○塩屋ハ男ハ業塩屋ハ女ハ業と云ふ西土の風も同ト○朝ハ海ハ  
 潮といハ夕ハ汐といふト○七月申有北ハ潮のちハ溢ると云ふ西土杭列  
 是ハ八月廿日ハ潮動はと云ふハ潮江潮といふト○此れやと云ふハ内海と云ふハ  
 潮れ指りたりと云ふハ一ハ此中ハ一ハ海編のかりと云ふと云ふト○入ると云ふハ  
 味ハ濃淡ハ塩の多少と云ふハ紅の源流ハ入の夜好まると云ふゆと云ふト○一  
 此音好ありともいふト○と云ふハ塩類要非要と云ふハ自然塩といハ濃淡ハ  
 濃本の産鹵地ハ海ありと云ふト云ふハ晒す新次をと云ふト待て刮取海水と  
 ともハ濃淡と云ふと云ふハ名を濃と云ふと云ふハ池中ハ貯金ハと云ふハ自然ハ  
 如細石子といふト云ふハ一ハ名を紅毛人持来と云ふト云ふト○塩津  
 ハ近ハ後升也義負ハ皇太子と奉と云ふハ折也且利義証ハ後光孝也と云ふ

しつろ小をろ○塩田は注法の所名也味義政の後に義政信列は因岳也一將  
塩田成といふ又抄注はあり名寄は塩田に川といふあり又塩谷氏あり

あぢひ 非波ごあぢひといふあり新万葉集は多る二月三日抄列は皆れ流り  
ま後群集せり後非波神社といひ日勝干のなかりといふをなす櫻徒は硯石  
といひ日勝干をちかきてといふなり霏雪録は車渠三月三日潮盡即出といふ  
より今れ人かひいひつるもま違ふ

あぢふ ちあぢふといふより塩入のまをち抄撰字後ハ賦字といふれハ醜ハ醜の  
俗字説文は厚酒也といふ古事記ハ塩折酒はり伊勢物語ハ法はそぬまうといふ  
とありと名寄ハ塩流と塩といふやうといふと少文字より法成は目とあぢふつ見は  
よかといふはを人かひいひつるもま違ふ目とあぢふつ見はよかといふはを人かひいひつるもま違ふ

あぢふ 塩布やといふハ後字かへハかみハ神とあぢふつといふももこあぢふ  
塩布といふあぢふといふ抄をなへハ神とあぢふハ權字ハ酒も月一○伊勢物語  
は金といふてあぢ里といふは塩田物語はあぢふといふてあぢふといふてあぢふ

あぢむ 萎といふより後をいふやういふあぢみといふはあぢむといふ周も  
同一抄撰字後ハ曝もいふあり欲干也といふより又鼓もいふあり

あぢふ 塩といふ味よりあぢふといふは居家必備ハ女人醜隨謂之  
無塩といふといふま違ふ

あぢふ 源氏といふ世はあぢふといふ訓はあぢふといふよりあぢふは  
あぢめ言り

あぢふ 塩といふは塩と焼電也明律ハ塩場電ハ人にも電がともいふより  
塩場ハあぢふと塩がハあぢふ也代醉編ハ塩電ハ字ハあぢふ奥州塩電ハ  
り古代は物といふて金四ツありといふとセツたりハあぢふといふてあぢふ

馬海三箇社といふ式外也○筆此名もいふ拾芥抄はあぢふ抄は紙ハ  
馬海三箇社といふ式外也○筆此名もいふ拾芥抄はあぢふ抄は紙ハ

和琴此名とせり○志保がまごくハ馬先蒿也といふ○橋本ふるもといふ  
すえりありと此名也といふ後山尾院所製

浦此名とてえハをさき陸奥此ハ好湯なりといふ此塩電

○頭昭いそくを申す乃みちの行くまて舟橋なるも家門此二十金此ハ  
舟橋なるも此申す志保がま此浦なるんをさきめて舟橋なるも此の舟橋ハ  
浦丹後此名のもすまめもあやかりといふもさき此舟橋なるも舟橋ハ  
舟橋けまたらてこそか舟橋なるも○陸奥此所といふ此源融公の河系院は  
新身後寛平法皇の河系院なるも舟橋の南萬里小路此東也

海橋なる 伊勢物産は二の川此事をかきいふなり一はやうまといふ海  
人此船なるも砂をたきとて後うちなるも舟橋なるも今も舟橋の塩をさき  
也といふ一説は融公此舟橋かまといふ河系なるも舟橋の塩をさき  
也て舟橋を焼くといふも舟橋人この舟橋かきいふ舟橋なるも舟橋は  
て舟橋は舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
道世志保なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも

とく山より池なりてたびうしく舟橋の海へ流入すを志保橋といふ  
舟橋の鹽表記は白鳥川原と打出て志保なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
小縣郡は今も舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも

乃さかり伊勢物産は二の川此事をかきいふなり一はやうまといふ海  
二此名此舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
調系と今編定舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
縁事此舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
盟約此古法なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
者永盡于食塩者也此誓事起於津志磨島而後竟為天下之通規也今之  
潮契是也といふ

志保なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも  
志保なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも舟橋なるも

和庚寅辰大旱後七月廿日此書かきりて七ツ以て少く赤氣凡の事にてハ  
 若狹と云く若狹より山成まのりて凡ゆる以て徳成一何此事にて  
 人如笑人若人海中人若ハ親しくまのりて一面は赤く若きよりハ間  
 道立てるも海成まのりて其の如くまのりて八九十年も及ぶ人  
 といふも何れもぬりてより海成まのりて其の如くまのりて夏内海ハ  
 其の如く魚鱗此ををまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 實治中七月八日赤氣見于北方如野火白氣如海交其中敵北斗  
 須臾滅と百餘抄をまのりて其の如くまのりて通監宗徽宗建炎元年正月元日此  
 秋もまのりても亦述一

志やれまのり 所若若の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 たり杉此所本綿此所を香まのりて其の如くまのりて其の如くまのりて

志やれまのり 塩と踐れまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 依光史和素依を婦曰世異荒塩と云く其の如くまのりて其の如くまのりて  
 同一つ後より火關降命此潮満瓊また其の如くまのりて其の如くまのりて

此状をまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて

志やれまのり 此代紀は潮満瓊と云く又潮満瓊と云く其の如くまのりて

志やれまのり 此の如くまのり 天地此を教十二萬九千六百年其息晝夜二  
 呼二吸也其息は元氣升りて地沈むよりて海が溢るは息が地を其  
 如く浮よりて沈むより

志やれまのり 此代紀は潮之八百重と云く其の如くまのりて○中後核は潮此八百重又  
 此れ八百重とも云く其の如くまのりて其の如くまのりて○潮道と云く其の如くまのりて  
 其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 百會まのりて其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 へも也と云く南海此潮道へ流るる船が留るよりて其の如くまのりて其の如くまのりて  
 其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて

志やれまのり 此代紀は海老翁と云く其の如くまのりて其の如くまのりて  
 と振守と云く其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて

△志は 島嶼又例字と云く其の如くまのりて其の如くまのりて其の如くまのりて





あんどろ 新造舟此宮、棠陰比事より云々○今古史に於て舟と稱す

深窓より一深氏より一深氏より一深氏より一深氏より○娼婦と云々の唐詩より新

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あんどろ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

△あめ 日本紀倭名抄に標と云々ありあめゆゑあめはあめと云々

あめ ○渚連とあめといふも万葉集に標繩と云々又繩延と云々あめと

あめ かつらんと豫てありせむ大沙舟と云々ありあめはあめと云々

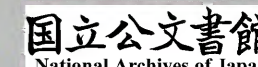
あめ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あめ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あめ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あめ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す

あめ 舟常此音の如く此舟と云々○今古史に於て舟と稱す





如く○船て心とふめりて心ふふと目高と云うと標れぬや  
○緊急れさふもせむる事あるやと云ふ事あり○出乃方言と云く  
事とふめりて云う

ふめす 呈示と云ふり似も普通と賈島詩十年磨一劍今日把似君  
又明人の書牘は凡く云う標れぬや○湿潤はぬやも云う○古事記は  
故能見志未岐其光所在故其地謂志未須也と云ふ

ふめや 日本紀は徐字又深沈と云ふりふめりたる体と云く増後と云ふ  
と物云うりてと云うも同きを云へ  
ふめれらりびと 津事と云ふ人との標繩の内なる人此れ又禁中を  
云う人と禁して安りぬよ入ふめりたる事あり

△ふめ 下と云ふは祢代口訣はト云也と云う此れ律と云へ○霜ハふが  
びぬ草本あるやをて周天と云ふと云へ又云ふの義肅殺此れ氣と云  
て云う○物語も云う月と云ふをぬめぬは此れ古今集よけふと云ふ  
らんかふも云うと云う奇ハ志もれてふいと云ふ用おと云う○と云ふ事あり

いふ後ハ孟子は上有好者下必有甚焉者矣と云う

ふめと 倭名抄は愛字と云ふり唐韻は木ハ細枝也と云う茂木此れ  
や久し新撰字後ハ枝と云ふりいか同書延喜式靈異記は栲字と云ふり  
此ハ若本二合此と云ふは若本は若弱と云へ古今集は若くは若  
城と云ふりハ竹枝と云うてゆへハかくつと云ふりと云ふ此れ後○倭名  
抄は皆とも云う訓せり捨去きあり

えと云く雪ハ山波いづけと云ふと云ふやハゆえはけ  
と云つと 十一冊といふお好の義と云ふ此れ盛と云うと云ふ此れ名と云へ  
渥ハ九月と云ふ渥と云ふハ初めと云ふ

ふもふと 下徳也倭名抄は物波と云ふと云ふと云うハ賦後  
ふもつけ 下格と云ふり下つ毛野此略○此本よふもつけといふり日光  
ふもつけともふの倉より云うと云ふは白たり南宮志もつけハ小也  
本集りふもつけや色はほらあぢと云ふと云ふ捨去き其地若も云う  
繡線菊也と云う○ふもつけらりもも小本と云ふ下つ毛はり縹麻也と

いづれなりけり

あまのゝみ 唐詩にむねとらるる鴛鴦瓦冷雲をききも

あまのゝみ 織物の経緯よりそとらるる大はるまほはゆは山樸若丹織

兼得とらる古今集

あまのゝみ 唐詩にむねとらるる鴛鴦瓦冷雲をききも

あまのゝみ 氏経日記に文徳十八年より下巻より對面傍に

あまのゝみ 丁がむらむらとゆ天正天文此の記録より

あまのゝみ 海島よりわらわらむづくとるゆ雲圖抄に童女傳とあり又下

あまのゝみ 江ともちり五節より事く裳から衣とらる

あまのゝみ △あま 古事記にむねとらるるあまはハ嘲笑者也とあり日本紀に

あまのゝみ こととらるる顔色より人と罵とらるる平家物語に

あまのゝみ 又あまつらむとむとらるる踏むけり伊曾保物語に

あまのゝみ つらむはゆとむとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ 又あまはあまのあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ○あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまは

あまのゝみ 人情世態を熟とらるる人とあまのあまのあまの

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

あまのゝみ ちとらるるあまはあまのあまはあまのあまは

退れ子細具るるなり○易と把ハ右手ヲ把テ右ハ膝より右ハ腰ヲ  
挿也唐詩ハ跪奉新書易在腰談王正欲伴漁樵と云ゆ○本ハ右ハ又ふ  
くらの形ありくとも近世或ハ極於て有り○礼服ハ肘ハ牙笏と有り○  
扇と易と有りてとも事字法拾遺より有り各位ハ人ハ此物ありて扇と  
用ひるも持あり○爵と音も也留○墨幾挺といふものと云ふ一易二  
易といふ○本草ハ本謂之杓瓠謂之瓢と云ゆひさこし訓あり○易く  
といふ草ハ易儀ハ伊吹ハ此山岩より花繁莖根ともハ胡蘿蔔此如  
賤民根と云ふや三日平山より有り○被服の遊女と云ふく稱す  
流石といふの義と有り

ふやう ○快ハ有りて海ありて書れと快といふ居必用と云ふと云  
訃あり文といふ振あり○門戸及櫃ハ此よりありともハ易易業ヲ櫃  
と鑿刺といふと有りともあり是こ○儀ハありてともありてハ快あり  
ありて 王制ハ貴賤ともありて鳥帽子と云ふ有り布衣と云ふ有り  
とて此古質朴の風れき白有り此布と有りて漢衣といふと裁縫の制

狩衣小回一と云ふ天竺も有り此法參り着所ありと有り○ハ幡宮放生會  
神幸此時ハ儀奉乃公卿ハ束帶或ハ衣冠と還幸此時ハ鳥帽子漢衣とて  
儀ハせり有り

ちやうげ 物ハ御生氣ハ方生氣ハ色と云ふ有り今生家ハ此月令廣  
義ハ生氣方正子二丑順輪十二月亥と有り此法帖ハ往東都逐生氣  
とも有り有り陰陽寮豫十一月進勳文以天子來年御當卦戴之生氣者八卦  
方位之名也○此ハ云ハ生氣と云ふ有り五十日忌といふハ砂石集  
より有り○西宮記ハ御生氣御服も有り云圖抄ハ陪膳尚藥著生  
氣唐衣と云ゆ○障礙ハ音も有り

ちやうど 唐司ハ治安二年ハ院莊司と云ふ中世ハ法及朝臣此より有り  
地と賜ハるる唐園といふも家く有り司人ヲ置テ主維セリ也と云ふ衛と  
唐園と別くは命令と有り於於有りハありて地及と云ふと有り  
司れ号も有り唐園も武家の威權ヲ押へられ司得司と有り也  
と云ふ豊太園の附きて徳野のハ唐園と有り

多うや 農人此長と名を稱するは庄司莊官の遺名也といふ治平略に村

長明律に管莊人多くあり里正も同一

おやうき 界尺といふ規とあり或は繩本とさういふとあり○加賀此後

石根板のいすこ片よりさるものさう○鄙俗は梳といふをさる

おやうとド 唱門師とあり今朝家乃在義長土用水合を勤る後之ニ水

記に諸外有唱門師村とありゆゆ金鼓打者といふ

おやくたふ 明衡往來石塔饗事二月石塔之功德惠業無量也といふ

さう今夜は遺より二月二月東福寺に於てある此皇太子法事と

いふは後河原河原に於て石をて踏をて香花と供養といふを好む

此皇太子は孝天皇御子也眼を喪ひてまをり小より世に盲と懸

田と名をたせたまふといふはかたは河原に皇太子の御座り

延喜帝此皇太子の御座り唯神名式紙前國丹生初は雨夜社に

○今七さた中の内典は多宝佛塔石塔沙塔泥塔ありといふ○近

水瀧生初石塔寺に奉養抄源平盛衰記にふんといふ

おやうだん 上座とあり坐席は上座を二座高く設るをいふは位をた

乃とあまの○世話に上座といふはとも是なり

おやうけい 上卿とあり上は上日長上をた上つんまうといふは公は若于此

中は一人おまそ日此事を掌る人といふは節令の内辨は等といふ

おやうせん 野菜海草はたを精進おといふは古き語に朝野群我御齋會

加供鮮文は精進物といふ青苔曳干和布曳干海松昆布といふなり○

醋食といふも精進をいふ事也○精進落はあまといふ開齋也又開葷といふ杜詩に

多年病酒開硯滴といふ字に字を同一○精進は語にといふは食をさる

さう今魚肉と食さる事とするは佛氏にさる

おやうせん 莊園といふ地を封せし田を賜ふをいふ湯は此田外をいふ

功田子孫といふ奇を施入せし給ねばといふは給湯するといふなり

この莊園といふは此那といふ境界も定まらぬといふは法をいふは

いふは名をたせしといふ○正統記に中古よりて莊園多くて不輸の

處多しといふは此にさる

おやうらふ 職原追加不謂是非二三位典侍号上藤公卿女号小上藤諸  
大夫良家醫陰陽道等女号中藤諸侍加茂日吉社司女号下藤と云々  
○大徳後高座を心かくるに田舎人れをさけりひらり上らふと云々  
いふ事也と云々

あうぐんづ 盛衰記は桓武天皇承安れ初と云々長久ろへきやうと云  
云々八尺八人形と送り鉄乃甲冑と云々云々東山此考一六修  
乃穴と有りて西向と立てうり云々云々是泉涌寺れと云々  
或ハ知恩院と云々の名宮院れ陵と遷移一或ハ上雲南山鳥れ勝軍此  
事とハ勝軍ハ勝軍地を堂り云々云々一或ハ地を之金剛幢六軍  
と云々是と將軍地を云々或ハ勝軍地を圖羅王乃稱り又泉涌寺此考  
なふハ園大曆と云々花園院れ渡此考ハ薩戒記と云々云々鳴動此考も  
深え元年と云々ハ大和此北也又治養元年と云々云々清盛ハ福多遷都  
乃北也ゆゑ二年此事ハ親長記と云々亨祿三年此事ハ後云々云々  
云々云々俱と是利將軍此时也云々云々長二年八月云々云々云々豊

大問薨せり西土れ詩も將軍塚鳴洛陽東も將軍塚静家無難と云々  
まろく賈氏談録ハ華嶽金天王廟玄宗御製碑の自鳴て數里と云々  
と云々河列えだのハ幡れ渡回必聖徳太子此廟大和武尊此廟堂  
津此必多田滿仲乃塚も鳴動せる事云々

△あやん 朝野群載公事と云々張説詩と云々宴美成功と云々云々唐制  
小治者也と云々内裡の云々云々造られて初て南極と云々云々  
初此句と云々位と云々せたまひて改と云々みゆと云々萬機此句と云々  
此事總合と云々云々朔且れと云々云々祥瑞と云々句と云々家と云々  
此附の  
云々云々初と云々此婦と云々麻と云々湯と云々湯と云々物事と云々  
云々云々夜と云々中と云々云々句と云々字書と云々滿也と云々云々  
○  
轉脚と云々云々と云々正保中越前船漂流の話と滿列字式と云々  
云々云々 俗と石と引車と云々河修羅帝統と權と争と云々  
書と云々云々帝統と云々云々

あぢく 筆法と入本よの六王義之の故事也書断は筆入本三寸と云々  
あぢく 宿紙とあり海人藤芥の五人職事内裏の宿直一伴紙と云  
論旨と書下す宿紙といふと云々又其紙書は紙と紙を以て清くす  
けり宿とありと云々名く又云々云々信の宿書と紙と云々一紙は  
延喜式よの熟紙と云々みてよめるありとも云々熟紙ハ唐書よ見  
ゆ生紙より對しと云々云々紙と云々

あぢん 物は手紙と云々云々墨と云々の手印ハ今よの紙は  
此より周禮此疏よ云々云々○云々の手紙よびて云々と云々  
國字とも云々云々古の海國印の紙は云々大和國字此や又海國より  
近江國の田郡印と和云々葛下郡印此や又此の形を野拾遺よ云々  
云々○徐官の説は宋儒此簡れよま書を用ぬ元人の書を用ぬ皆喪制  
の事と云々の云々の云々

あぢつせ 仕官の事つと云々出世といふハ出身と同一家と云々云々  
ら此は佛家此語より得る云々佛家よハ世間と云々世ると云々  
あぢくむら 今大寺よ參詣する人ハ塔頭と宿坊と云々○神宮雜例  
集は離宮院宿坊号齋殿雜事記は祭王之御坊を云々云々  
あぢりん 手裡劍と云々擊劍此術也と云々南史蕭摩訶傳より鏡  
鏡かりと云々

あぢつさひ 述懐此字文選よ云々云々後漢此云ハ此世か家  
○懐舊ハ詩り懐古と云々云々文選より摠懐舊之畜念といふ云々  
述懐と少云々云々

あぢふまゝ 流石事よ衆よ交ふと云々云々ハ世談此事よ云々  
亦うわらわの事と云々云々交ふ事云々云々又家  
語よ丹之所載者亦と云々云々

△あよや 雲圖抄裏書よ初夜自亥二刻至于子三刻後夜自子三刻至

于丑四刻と云ふ事又云は下よる也

所司の名の内裡式より拾芥抄より行事勾當公文謂之所司と  
云ふ事京師所司代職ハ是利家此所より起る京此所司代都察氏ハ貞和元  
年より京極持清後花園院の室徳元年より侍所司に補せられし時より多  
賀を後中宗高忠とて所司代とせし事今も所司代と呼ぶ所  
司代源高忠ハ海東諸國紀をせし事又周防列山の所司代とも云ふ所  
内外言の所司代ハ小幡色より起る今奉侍と稱す○武人と諸士と稱す  
るハ様を更しより也

如本此字記録より多く又西涯音よりむと云う裝束此所  
といふ事此めくこつく張方也今長島帽子と表自下と云ふ所此を  
初し若是之信より云ふくありしハ如本ありぬ事と云ふり又云ふん  
ともいふ松並此事と云ふ

觸穢と云ふ濁穢此より起るす梵書より淨觸とも成觸とも  
云ふ事又東司具ハ觸杖觸桶と云ふ事色聲香味觸法此觸とも

叙爵と云ふ事大凡は位より起る事あれども最末此  
とて名目とする色例ありて後位下より叙する事あり○又崇爵と

云ふ事崇爵身を買ひて思ひてと云ふ民ノ爵と賜ひて買ひて  
る事位ノ爵事の如くありて位より起る事ありて買ひて欲する事  
△云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事

云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事  
云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事  
云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事

云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事  
云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事  
云ふ事 仁賢紀ハ願戀と云ふ事位下より起る事ありて買ひて欲する事





あうたま 日本紀万葉集、真珠とあり延喜或は白玉とあり長曆官府は白玉  
 幾丸といひ菅方まこと此玉といふ法あり○美事集、水良玉といふすゝ友志  
 子や及ら也全浙兵制、帽子と蒲西と諱し瓜瓜すいといふあり○大  
 神宮式及儀式帳、髻結紫線加美阿氏帛白玉といひけり神代紀も髻カキ  
 髪カキまきと系珠の事とあり法義經も珠久在髻中不美與人といふあり○  
 梵書、赤真珠なり金色に若くは黒珠は黒真珠なり又青色ありたり  
 ○催馬樂葛城はこれ系珠といふかぶらふといふ光仁紀の童謡といふ  
 けりりさうふ光仁紀今此は白壁といふや好壁といふやけりて光仁は  
 少諱も白壁と稱する誤りて白壁といふ一とくは諱も壁といふありか  
 二八度會光隆は説也○神賀詞は白玉赤玉青玉といふあり修海家或は  
 赤水橋八枚白水橋十六枚青石玉四十四枚といふ  
 あうたま 菊は六要黄とまう詩人此賞する赤紫用に入あもまう同  
 ころに奇も多かくもみハ新撰菊は紫とあり花史左編は菊品新羅一  
 名倭菊千葉純白とあり群芳譜は標韵高雅非尋常比といひつははは

秋深はせと名をぬらうとてはらう白菊と秋人も詠せりあはれ人あはれ訓  
 りありて新撰の字を填へ也といひ○衣はまよひをれとて白うらま  
 う也といひ○舊記は白菊神祠といふころハ今此少者宮式は少派必記伊  
 郡御諸神社といふ是に今移る湯は八葉をそとをあらといふ神体ハ神功  
 皇后也といひ傳ふ○妙音院相國熱田宮を彈一法ハ琵琶と白菊と号  
 す今も所傳はつらとそ  
 あうたま 日本紀は素幡素飾白旗をいふて皆降首は時を用たりあまの  
 法も同○世は源氏れあつて平は赤といふ源平盛衰記は平はハ  
 赤とを拵げ八幡殿の家は白色と拵げ刑部殿は赤黒と拵くやど  
 足兼美公は記も系人仍傳うとく當はを継り白綾無文は旗と也  
 ちの事多うといふ新編纂圖は八葉家は純負純親王は太將軍は宣  
 旨りて丹波門混白は幡と賜うといふ事記といひ二条院の御宇信賴義  
 朝は叛り時官軍入大内は白幟立赤幟の事り是平重盛公は謀也○  
 白旗はは赤赤といふ赤松は据一所也

あしかし 燻下放言は士人郭暉寄妻誤封一白紙去細君得之乃寄一絶  
云とるより俗謡やちと白紙文とくめとちち也

あしひと 凡雅集は白糸と人の心よとくく入る半とよめりて故上人  
びりしれ人れとちとあふ糸とむむはをひりあふりりたあん

墨子は見練糸而泣之為其可貴可貴果といふ事也○今君とあまする  
る云よりわらわの糸也○あまの糸は白を此体とて若くあはれはあふ  
もやり糸ともいふ○あんとこといふ女中詞也

あしづと 日本紀は白癩をよみ倭名沙り白癩とよめり白膚は  
かりあふりてふ同

あしがづく 万葉集は本錦は頭辞とす白髪着は髪似てるといふ  
又本錦とあふりてふ同

いれふはとわかりものはあふりつけわる裳はとよめて、わあ  
と遺唐使は賜ふ御製は本錦とゆくよまて裳着すてあふりてふ  
は衣へ糸糸のいとあはれ附のさあふりてふ

あしかし 白室也外神功より練費は緒を名く也といふ又まはすけ  
白さうす物とせんびあふりてふ同也といふ藤原集は若衣更衣はむと  
とあふりてふ同也といふ藤原集は若衣更衣はむと

あしよとく 夏衣は衣とてやまわれば本錦もあふりてふ同也  
あしよとく 神代紀は白幣帛とまり衣へゆくとすてあふりてふ同也

あしよとく 万葉集は白本錦はとてゆ本錦は花勝也とてゆとて  
あしよとく 万葉集は白本錦はとてゆ本錦は花勝也とてゆとて

あしよとく 赤人れ糸とてゆ衣とてすてあふりてふ同也  
あしよとく 赤人れ糸とてゆ衣とてすてあふりてふ同也

あしよとく 延喜式は白纒鈴とてあふりてふ同也  
あしよとく 延喜式は白纒鈴とてあふりてふ同也

あしよとく 勅りてみゆとてあふりてふ同也  
あしよとく 勅りてみゆとてあふりてふ同也

万葉集は秋は詠白大鷹は白塗は小鈴とてあふりてふ同也  
万葉集は秋は詠白大鷹は白塗は小鈴とてあふりてふ同也

同此則船と名とてあふりてふ同也  
同此則船と名とてあふりてふ同也

あゝぬひのつし 不知此流紫より方系集は白縫流紫と云ふ景行  
 天皇流紫よりさう流ひ一時秋暗くては船はくべし流りありしは忽  
 火に光とて存まつを流りて事日中流りては是海光今もを  
 打つりては流し海上は火多くとぬいひ肥前肥後もとら火にわひ  
 同義あり流名抄は肥前ひのちのち肥後ひのちれいひとある豊後  
 古歌甲浦乃奇火の列の事ありて古事記は流紫玉溜白別と云ふ  
 △あり 後又尾をより下指の事ありて神代記はかたはとあり伊豫  
 備後より相摸とんがと云ふ○流氏はあつてあかく引てと云ふ裾は事  
 建武年中行事は面白しあかまのあつたみまを流りてあつてあつて  
 ありとつとも古流はとぬ東流はかくと云ふ事  
 ありび 流氏はとぬ細流は後弱とありと云ふひ奇と云ふひ百者  
 此列は後干とあり文章は龍頭蛇尾と云ふ也  
 ありとく 退字とあり日中流は任字まて遠巡ともよみ童蒙頌韻は撰  
 と訓せり流はとくし祝詞式は退字ととくしとあり古流日中流はとくし

とくしとくしとくしとくし

ありとくし 知為者此流紫とありとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 老若流紫とありとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 ありとくし 日中流は昔字後手やと云ふありとくしとくしとくしとくしとくし  
 乃流しと云ふ○後或帳は短手二段拍畢時後手一段拍罷向と云ふあり  
 作紙或は拍後手退出と云ふ齋王御拜と云ふありとくしとくしとくしとくし  
 ありとくし 尻打上此流紫ありとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 ありとくし 後言と云ふ流氏はありとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 ありとくし 日中流は端出之繩と云ふあり流名抄は流連と云ふありとくしとくし  
 字形流名訓はとぬ葉は流と云ふありとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 左繩は日道左旋と云ふありとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
 とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

あうへのみや 後宮此訓也云德立后此宣命ノ斯理幣此政と云々

△志系 知識ホ此字とあり唐山此後語ノ知道と云々道字と云々

方系系ノ領字とあり任務也後と云々

少と何此列と知と云々

羹云水路と云々

也羹湯也と云々

と云々系ノ和物荒指と云々

と云々と云々稀の及乃病と云々

やうと云々

あうす 注記書録と云々

あうー 祚代此ノ壘と云々

藁方ノ強と云々

塩囊抄ノ電と云々

○日本此ノ氣字北字候字圖字と云々

えんまあり ○標もよあり坐と云々

標と云々

めり ○記號と云々

あうーと云々律此いまいめかりと云々

あうへ 日本此ノ導者と云々

やうへー ○日本此ノ為師と云々

あうへー 日本此ノ悔字相字と云々

あうまもあうまうと云々

あうへと云々 源氏此等と云々

郡の事と云々

みくちと云々

詞林採葉ノ祝大物主神以杉木為主と云々

ては表をうりしを○大貳有國に經るを京に於ては青推の社を

みよるふとすはたけよつていそむくは梅花ののみやえ

ふあやねのひるあへ

あうはやま 標山とまり大嘗宮は赤いあはれ國司列主とすは新はあう

は本よ心を造りしゆくは作らねをかくて引き事後日本後記よ委く見ゆ

○淳和帝は大嘗祭に凡玩好金銀刻鏤等飾一切不用標以賢木造之用橋

并木綿類書悠紀主基字著樹杪以清素供神事耳と類聚國史よんごり

あうはとこ 紫衣の日記よんごり神坐は沙粒とすはちやう

△あれ 竹丸おぼよむらたはあはれよあはれを紫衣おぼよあはれとあはれ

とんごり○たのうらうう人よあはれつかこもあはれつたあはれ

あはれもの 源氏よあはれものおぼえんとんて指草紙よあはれとかくとらゆ

んごり中納文粹よ鑑るよ白おかけり万葉集よ愚人よあはれとん人

よありたは源は無慧ハ所謂白癡とんゆ

△あう 代とすは神代記よんごり紫衣此の如く皇代記よあはれとあり

○あは苗代といひ日本紀よ草代在列は赤い草代とすは直よとすはと梅は

かりよと商家よ代物の様らう○頃と日本紀よあはれとあり畝百為頃とい

はよ合とすはた國よ五十餘萬頃海は渡り事日本紀よんてたはは

る取のせや十町とすは十町即一萬石は地を吾川郡よあはれり是代の

かりよと傳名抄よ頃今之法六町六段二百四十歩とんごり傳名代といひ

よ八是れありや拾芥抄よ七十二歩為十代五十代為一段とんて三代格よ

令前租法熟田五十代二百五十歩為五十代とんごりよと十代田五百

代小田とすは又東代西代といひ田と平たにるとありとありとありと

かく取れあはれとすはといひ河も同一後世幾代と音よとすはなり○今俗價

とありといひ代れとすは○城とすは白聖とすは名くら成へ又依れはとすは小

城と堡障也○槌代舟代土代壁代とすは實の義也○城と姓よハ音よ呼や

とあり 白といひとすははあはれとすはとあり○攝政頼通公曰若定頼

才能賢則賢然緩急亦甚我聞博雅才人之筆管絃无所不通而天下緩急

白者也定頼豈甚耶白者猶言知名者見小右記○傳燈錄はは印度以

一年為一白と云

白と云 倭名抄は博押と云り油此事より今ハ白と云り○新撰  
字彙は博と云り牛乳也と云り

白鐵と云 職人等今ハ白鐵と云り白銅鏡ハ之○遊  
如白女ハ丹波古太の玉鬘り女なり古今集ハ之と云り大和物語ハ源朝  
如白女と云り世世記ハ之ハ則觀音為祖中君小馬白女主殿蟹嶋則  
宮城為宗如意香爐孔雀三救神崎則阿孤姫為長者孤蘇宮子力命小兒  
之屬と云り

貨物を代物と云り日本紀ハ草代之物兵代之物延喜式ハ倉代  
物と云り○禁裡洞ハ地と云り海人藤芥と云り

銀と云 白金ハ之ハ天武天皇の時より始メ我邦ハ之より延喜式  
と云 宰府より毎奉銀八百九十兩と貢と云り後法皇伊豆より始メ  
○五雜俎ハ唐太宗賜房玄齡黃銀帶則黃銀非金明矣漢武帝紀收銀錫  
造白金則白金非銀亦明矣と云り○ちがが銀多き一錢也云り 圓形

薄れと云 此ハ面ハ矮雞と鑄つけり京室町の表林菴と云り數百粒  
あり今十餘粒と云り寺加蓋清正此菩提也と云り朝鮮銀  
也○いさかハ銀銀○銀高ハ吉野の山より征夷將軍興良ハ之より下  
常ハ白妙と云り文字ハ純て白く妙ありと云り薄と云り白ハ

倭名抄ハ假借此字と云り純布此名と云り万葉集ハ白細布と云り  
白樹此袖白本綿ハ吾衣袖と云り又白妙ハ布につけりも菴葛此布  
と云り又白妙ハ麻衣と云り又ハ喪服と云り○古語拾遺ハ植敷造  
白和幣と云り又ハ白と云りハ穀皮と云り造る布と云り白糖と云り  
白小と云ハ本綿也と云ハ白本綿とも云り○白妙ハ雲を白妙ハ白妙ハ  
かゝる事多しと云り又ハ白と云り

日本紀ハ俗と訓ヤリ白衣ハ後續紀ハ宣令ハ公家人も白衣  
と云り僧俗と緇素と云り梵書ハ白衣居士華嚴音義ハ西域俗  
人皆着白色衣也と云り○日本紀ハ純と云り白と云り素之  
輕者と云り○神代ハ人亦云ハ白衣と云りハ淨衣也と云り○今人喪服

白と云 倭名抄ハ博押と云り油此事より今ハ白と云り○新撰  
字彙ハ博と云り牛乳也と云り

白鐵と云 職人等今ハ白鐵と云り白銅鏡ハ之○遊  
如白女ハ丹波古太の玉鬘り女なり古今集ハ之と云り大和物語ハ源朝  
如白女と云り世世記ハ之ハ則觀音為祖中君小馬白女主殿蟹嶋則  
宮城為宗如意香爐孔雀三救神崎則阿孤姫為長者孤蘇宮子力命小兒  
之屬と云り

貨物を代物と云り日本紀ハ草代之物兵代之物延喜式ハ倉代  
物と云り○禁裡洞ハ地と云り海人藤芥と云り

銀と云 白金ハ之ハ天武天皇の時より始メ我邦ハ之より延喜式  
と云 宰府より毎奉銀八百九十兩と貢と云り後法皇伊豆より始メ  
○五雜俎ハ唐太宗賜房玄齡黃銀帶則黃銀非金明矣漢武帝紀收銀錫  
造白金則白金非銀亦明矣と云り○ちがが銀多き一錢也云り 圓形

薄れと云 此ハ面ハ矮雞と鑄つけり京室町の表林菴と云り數百粒  
あり今十餘粒と云り寺加蓋清正此菩提也と云り朝鮮銀  
也○いさかハ銀銀○銀高ハ吉野の山より征夷將軍興良ハ之より下  
常ハ白妙と云り文字ハ純て白く妙ありと云り薄と云り白ハ

倭名抄ハ假借此字と云り純布此名と云り万葉集ハ白細布と云り  
白樹此袖白本綿ハ吾衣袖と云り又白妙ハ布につけりも菴葛此布  
と云り又白妙ハ麻衣と云り又ハ喪服と云り○古語拾遺ハ植敷造  
白和幣と云り又ハ白と云りハ穀皮と云り造る布と云り白糖と云り  
白小と云ハ本綿也と云ハ白本綿とも云り○白妙ハ雲を白妙ハ白妙ハ  
かゝる事多しと云り又ハ白と云り

日本紀ハ俗と訓ヤリ白衣ハ後續紀ハ宣令ハ公家人も白衣  
と云り僧俗と緇素と云り梵書ハ白衣居士華嚴音義ハ西域俗  
人皆着白色衣也と云り○日本紀ハ純と云り白と云り素之  
輕者と云り○神代ハ人亦云ハ白衣と云りハ淨衣也と云り○今人喪服

下白とて周るは清純此人は若くするも同じ性古より此礼を兼服  
といふこれなり

ありうるなり 信純草よるゆ白瓜の祝ふありる甲及びくこれとそえけ  
れやの聖規増都さへる物とあもあらずといふれと色ハ赤まき草あれ  
ぬまるといふとす魚一ともさへ或ハ渾沌とあり

あらしめす 神代紀は知字又奄有れ字祝詞式は知行の字所知食  
の字中とありろ一及てせめとハみふは同一知者とといふ也万葉  
子事しめとともいふ

あらしめす 倭名抄万葉集は皷とあり肉輪の表ありへ一文選は波と  
ありも同一古今集は波の志とあり新撰字鏡は皷は此の志とあり

あらしめす 日本紀は習俗と訓せり作業は兼へ一又事字とあり又云  
為為行行業所為所行行能とあり伊勢巻終はまらまらとあり  
あらしめす 鄙吝をいふ皷よりわらわらとありふもふもつけたりとも

あらしめす

△あらしめす 常世物産よし皷とありまらまらとありあらしめす  
の精せぬなり

△あらしめす 万葉集よるまらまらとあり此皷とあり

△あらしめす

倭訓栞前編十一

倭訓栞 卷之十一

